

手をつなごう2008

平成20年9月24日
岡山県立東備養護学校
支援部だよりNO. 11

公開講座報告③

講座3：少年院から教育現場への提言
—発達の見点を取り入れた少年院の実践—
＜講師＞広島少年院専門官 遠地正則氏



278名の参加申込をいただきました。教育・医療・福祉等の分野からも注目されている少年院の教育について、映像も交えながら具体的なお話をしていただきました。「感動しました！」という声をたくさんいただきました。感想の一部をご紹介します。

- ・すばらしい！これぞ人間教育！感動しました。
- ・発達障害の子どもと接する時、「どこまで、どのようにして」ということをいつも考えます。無理と思えばできるようになる芽をつんでしまうことになるし、やりすぎでは（まだその状況ではないのに）子どもを追いつめることになりはしないかと思いながらの毎日です。でも、1つ1つどうしても必要と思うことは積み上げながら進むことの大切さを、もう一度再確認させてもらった講演でした。失敗もありますと言われた一言に勇気をもらいつつ、子どもとまた向き合っていこうと思います。ありがとうございました。
- ・義務教育に携わっている身としては、学校でももっともっと一人一人の子どもの課題を見つけ、工夫と情熱で取り組むことができるはず、いや、すべきと感じました。学校全体の構造化—2学期のわたしの課題です。
- ・個を育てること、集団を育てること、この両方が必要であること、すべての学校で大切なことだとあらためて実感しました。大変感銘を受けました。
- ・初めて、少年院の内部を知りました。涙が出そうでした。どの児童生徒もよいものを持っているし、成功体験や成長で、人は変わると思いました。
- ・特別支援の考え方がとても勉強になりました。特別支援といいながら特別と思わずに一人一人の子どもにしっかり寄り添っていくことが大切なんだろうなと思いました。ビニールテープ、温怒計、レッドカード、イエローカードなど、自分の現場でも実践したいことがたくさんあり、今後の学級経営へ生かしていきたいと思います。
- ・明日から、ここを新しく考えてみよう、やってみようという気持ちになりました。毎日我々が取り組んでいくべきことの大きな流れとともに、具体的な内容についていろいろ教えていただき大変参考になりました。
- ・少年院の体育の授業、長縄の取り組みを見て、とても熱くなりました。未来を担う子ども達の教育に関わる教員としては、目の前の子ども達の10年20年先を見据えて、努力を惜しまず、あきらめることなく関わっていくことが大切だと改めて感じました。この気持ちを明日からの教育にぶつけていきたいと思います。
- ・とてもわかりやすい講演でした。実践例もいろいろ示していただき、このようなきめ細かな配慮をして、生徒を支援していきたいと思いました。
- ・「目の前にいる子ども達をよく見る」ことや「その子どもの凹んでいる部分」を見て、「個別に支援する」ことは、私たちの特別支援に通じる部分だと思った。私は、少年院というのは、もっと「集団」が主で、規律に基づいて個別的な配慮が薄いのではと勝手に思っていたので、自分の偏見が恥ずかしいと思った。
- ・発達障害の子ども達に気持ちのコントロール、基本的な学習、基本的な身体づくり、基本的集団行動の定着への取り組みが実践を紹介してもらいながら理解できました。大縄跳びの映像、涙が出ました。切って持ち帰った縄跳びが、社会に出ても心のよりどころになるだろうと予想されました。
- ・今日から、役に立つ話が聞けて良かった。子育てにも役に立つことが多く、自分自身も見直し、ゆとりを持って日々を過ごしていけたらと思いました。子どものサインをしっかりと見逃さないようにしていきたいです。

